

ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE vol.41

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2009.春号]



日比野克彦さんとMATCH FLAGつくりました。



MATCH FLAGとは

2009年1月20日(火)に、熊本で開催されるサッカーの国際戦(日本VSイエメン)を、熊本市民と共に盛り上げるために、アーティストで、東京芸術大学教授、日本サッカー協会の広報委員でもある日比野克彦さんが街の人達に呼びかけて、ワークショップを開催することになりました。

一枚の白い布に、対戦する二つの国のナショナルカラー(日本:赤、イエメン:黒、赤)の布で、日時(2009.1.20)、対戦国名(japan, yemen)、場所(Kumamoto)のモチーフを縫い付けてフラッグを作るワークショップをサッカー協会と市民、行政などが協力して運営、開催しています。できあがったフラッグは、中心商店街のアーケードや空港、駅、対戦会場(KKwing)などに吊るし、市民が一枚とってサッカー国際戦と選手たちの歓迎ムードを盛り上げようというもの。

当日は、チケットが既に完売しているため、市民がみんまで試合を観戦できる場として、街なかでのライブ中継も実施予定。

アートとスポーツを通じて、街のにぎわいを創出するMATCH FLAGは、人と人を繋げる事業を全国で展開している日比野さんが、アートとスポーツの融合を試みた、初めてのプロジェクト。

このプロジェクトが、熊本から発信され、日本全国、そして世界へと広がっていくように、ぜひ、多くの人に参加していただければと思っています。

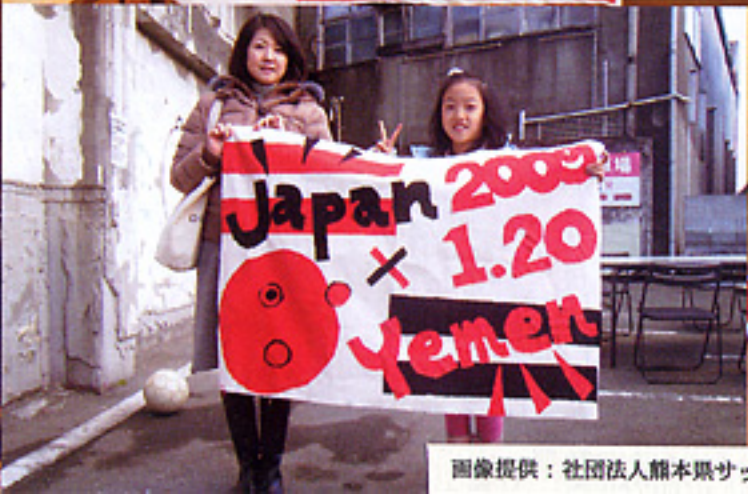
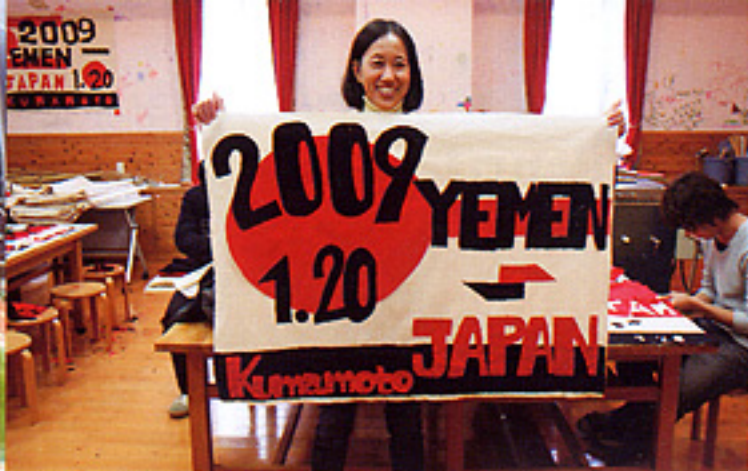
(協力) 日本サッカー協会、(社)熊本県サッカー協会、熊本市、商店街(上通、下通、新中町、河津町、古町)
熊本市国際交流協会(熊本市国際交流事業団)、熊本市現代美術館(熊本市美術館文化振興財団)、熊本日日新聞社
(主催) アスリートクラブ、熊本青年会連合、Zen design Project

MATCH FLAGの作り方

1. 白い布を、横が4、縦が3のバランスで準備しよう。
2. この試合をいつまでも記憶しておくためのパーツを準備しよう。
どこどここの国が、いつ、どこで出逢い、誇りをかけて戦ったかを覚えておくために。
国:赤い丸と赤と黒の帯、japan yemen
時:2009.1.20
街:Kumamoto
3. それぞれのパーツを、白いキャンパスの上に並べてみよう。
レイアウトが決まったら、ちょっと遠くから眺めてみよう。
奥に入ったら待ち針で仮止めしよう、風に飛ばされないように。
4. 針と糸を通して、記憶としても縫い付けよう。
記憶は薄れても、フラッグは残るかもしれない。
フラッグをなくしても、記憶は残るかもしれない。
5. このフラッグを作った人がいる。
このフラッグに迎えられた人がいる。
国のために戦う選手も迎える街の人達も、このフラッグを見たとき、きっと心は繋がる。
みんなきっと、忘れない。







Match Flagプロジェクト 記者会見での日比野克彦さんのメッセージ 2009.1.7

まず、Match Flag(マッチ・フラッグ)の記者発表をするにあたって、サッカーのイベントのプレス発表、記者会見を美術館で行うというのは、おそらく日本ではじめてのことだと思います。この今日のこの形式がすごく画期的なことだと思っております。

今年最初の国際戦が、1月20日のイエメン戦が、この熊本で行われるというタイミングに、運命的なものを感じています。一昨年と昨年とにまたがって、私はこの熊本市現代美術館で展覧会を行わせていただきました。「HIGO BY HIBINO」という展覧会で、熊本の人たちといっしょになって、熊本城築城400年記念の年に、みんなで熊本自慢の石垣と武者返しを作ろうと、4000個近い石を段ボールで作って積み上げました。その時に出来たつながりや熊本に対する想いと、この出会いがなかったら、Match Flagもこんなに具体的には進まなかったと思います。正直言って、この企画を出したのが昨年末ぎりぎりです。そして、JFAの方々と、地元熊本の皆さんと、年末年始のどたばたしているなかで企画を進めていって、始動にこぎつけたのも、この美術館と一緒に色んなことをやらせていただいたベースがなくては出来なかったですし、何よりも1月20日に熊本で試合が組まれたという、運命的なものがあったからこそこのMatch Flagだと思います。

この熊本の地で、これから始動させようとしておりますMatch Flagは、スポーツとアートの融合を目指して考案しました。フラッグといいますと、いま私の後ろにDREAMと印されたサッカー協会の旗が掲示されています。すべての人たちの志や気持ちを一つの旗につめこんで、その旗のもとにみなが集うという「御旗」ですね。どの地域でもどの時代でも、みんなの気持ちを風にたなびかせて、遠くからでも見えるように掲げるという旗の役割があります。それぞれの地域・国にも旗があって、その地域の人たちが、普段は日常生活のなかに個人というものがあるんですけども、スポーツなどの集まりの時にその旗のもとに集まって気持ち新たに、自分たちが、今、ここに、同じ価値観をもった同じ血が流れた人間たちがいるんだということを再認識する時があります。今の我々の時代では、例えば「日本」を感じる時というのは、やはりスポーツの場というのが多いと思います。

そして普遍的な行為として、自分達がこれから色々な価値観を築いていく時、そして今までの経験を次に活かしていく時には、いつの時代も共通の認識をもって、そしてまた、ここの日常に帰っていくという繰り返しが必要だと思います。そういうことで、僕は、今回アートという個人の価値観のなかにスポーツという共通の認識がもてる価値観を組み込んだものを提案していきたいと考え、このMatch Flagを考案いたしました。

私もサッカーがずっと大好きで、アウェイに応援しにいたりとか、ホームのゲームも応援しに行ったりするときに、旗を振ったりして応援するわけです。試合において、ホームでアウェイを迎える、ホームがアウェイに行くっていう、そのときに自分たちの輪郭線が一番はっきり浮かび上がってくるわけです。今は次のワールド・カップに向けてのアジア最終予選を戦っている時期で、ワールド・カップの最終予選が近づけば近づくほど、「日本」を意識する機会は多くなります。

スポーツとアートを融合することによって、これはスポーツがもっともっと市民の中に浸透していくきっかけにもなるでしょうし、そしてサッカーが文化として認識されることによって、サッカーが強くなっていくと思います。サッカーはただのスポーツではなく身体表現だと思えますし、それも単なる運動神経の連続でゲームが成り立っているのではないと思います。イレブンがピッチに立って、そしてサポーターの2万人、3万人という人たちが同じイメージを描いて、そういう共通の価値観を得られてこそ、強くなっていくものだと思っています。皆でこの時代の、この地域のサッカーを築き上げていくには、やっぱりその時代その地域の文化を強くすることが、サッカーを強くすることになっていくと思っております。

このMatch Flagによって、ここ美術館でサポーターたちの想いをかたちにしていきたいと思えます。街のなかに美術館と美術が出て行って、サポーターたちと同じ想いを描いて、それを具現化していく、色や形に置き換えて、それを見えるものにしていく、皆でそれを愛でる場を作る。これが美術の可能性、そして、サッカーがより文化になっていく可能性の礎になっていくのではないかと感じております。



MATCH FLAG 3つの願い

- 1 ここに友がいる誇り。
- 2 海の向こうに友がいるトキメキ。
- 3 二つの友が出会い、生まれる力。

Match Flagについてのリーフレットをつくりました。後ろのページにMatch Flag3つの願いを書きましたので、読ませていただきます。「1 ここに友がいる誇り。」「2 海の向こうに友がいるトキメキ。」「3 二つの友が出会い、生まれる力。」1は、いわゆる自分たちと同じチームを応援する仲間がいる誇り。ほんとうに嬉しいですね。みんなで応援しようよという気持ちです。ひとりでテレビの前で観戦しながら、応援するのも悪くはないのですが、スタジアムに行ったり、街に出てみんなで応援するという、その誇りですね。

2は、今回ははるばるイエメンからもサポーターたちが来るわけですが、イエメンってどこにあるんだろう、どんな人たちなんだろう、どんなサッカーをして、どんな90分のゲームが展開するんだろうと想像する。そこにやはりトキメキがあります。ドキドキする気持ちがあります。まだ見ぬ海の向こうを、見えないものを想像する、その気持ちです。

3は、イエメンのことそして日本のことを考えながら、フラッグを作っていく、その時間が、新しいものを生み出す時間だと思います。90分の試合のなかで2つのチームが試合をすることによって、すべてのチームが切磋琢磨してレベルアップに繋がるのですが、我々サポーターも、イエメンのことを思うとき、違う文化のことを考えるときに、次なる可能性を生み出す力がその瞬間生まれるのではないかと思います。

実は、このMatch Flagのロゴマーク...正直言って昨日作りました(笑)。Match FlagのMとFをかたどって、2つの大きな頂きからフラッグが高くなびています。旗が違う方向にたなびくことは現実にはないですけども、互いに違う追い風を求めてたなびいている様子をマークに描きおこしております。

ここで突然ですが、僕の思いとして、記者会見のこの場所を提供していただいている、熊本市現代美術館の桜井武館長に一言お話いただきたいとおもいます。熊本でMatch Flagを成功させることで、日本中の地域におけるサッカー文化が変わると思っているので、ぜひ桜井館長に、美術と熊本と、そして美術とサッカーと、熊本の意気込みを一言いただければと思います。

桜井:基本的に、私どものこの美術館は、美術館だけで存在できないですね。他との結びつきだとか、クロス・オーバーしていかなければならない。それをやり続けているし、これからもそういう展開をしていきたいと思っています。特に今回のMatch Flagは、もちろんサッカー協会があって、県があって、市があって、それから商店街、こういう連携と結びつきによって、より大きな成果をあげていくと思います。

今、日本全体の経済は非常に悪いにも関わらず熊本には活気があります。勢いがあります。もちろん、本丸御殿を目指して熊本城にたいへん多くの人たちが観光にやってくるというのがあります。だからタイミングとしては非常に良いときに、このイベントがある。スポーツのイベントであるにも関わらず、まるでアートの祭典のような、そういうイメージも与えます。スポーツ、それから美術、ほかのアートを含めまして、基本的には私は同じというか、創造性があるのはじめて成り立っているものと考えています。もちろん、その今回のワークショップMatch Flagにしても、スポーツであり、美術であり、それからデザイン感覚であり、商店街とも結びついています。これが成功すればきっと文化的な密度も高まっていくということで、私どもとしては、この記者会見とワークショップがここ熊本市現代美術館で行われるということ、非常に誇りに思っております。ありがとうございました。

サッカー応援の新しい形「MATCH FLAG」 熊本県サッカー協会 福田哲郎

サッカー日本代表戦の熊本初開催に合わせて行われた、世界でも初めてと思われる取り組み「MATCH FLAG」。10月に試合の実施が決まり、12月に初めての会議が行われてからわずか1ヶ月で、大盛況のうちに終わり、試合の盛り上がり大きな役割を果たしました。県サッカー協会(途中から「主催者」として関わった私の感想を述べてみたいと思います。

関係団体の方々の協力

「今回のプロジェクトが成功に終わった要因は？」と聞かれれば、私は「関係団体の方々の協力のおかげ」と答えたいのです。正直なところ、サッカー協会関係者は大会本体の準備に追われ、どうしても参加が難しかった現実でした。そんな中、熊本市、現代美術館、国際交流会館、地元商店街の方々がそれぞれ、サッカーの日本代表戦を盛り上げるという目的のために、大変積極的にご協力いただきました。どれひとつ欠けても、このプロジェクトは実現できなかったと実感します。

どんな組織でも、形はさまざまながら「上下関係」で規律されているものですが、このプロジェクトは「熊本で行われる1月20日の国際試合を盛り上げたい」というためだけに、行政・民間、スポーツ・美術さまざまな立場の方々が出せる知恵を出し合って、(時にはルール違反すれすれのことやりながら?)互いに対等な関係で進められていったことは大きな意味を持つと感じております。

広報としての視点

このプロジェクトの発案者である日比野克彦氏は、(財)日本サッカー協会(JFA)の広報委員を務めています。実は、同委員会は昨年10月に立ち上がったばかりの新しい組織で、これまでは事務局内に「広報部」という組織はありましたが、日本サッカー全体をうまくPRし、社会との関係をうまく保っていくための意思決定機関として設けられたものです。

熊本県サッカー協会においても広報の重要性を痛感し、昨年来さまざまな取り組みをスタートさせてきました。JFAとの連絡を密に取り始めていた中での、日比野氏の提案でした。

現代美術館で1月7日に行われた記者会見をはさんで、熊本のほとんどのメディアに露出し、大会直前には全国のスポーツ紙などにも掲載され、注目が集まりました。繰り返し取り上げてくださったメディアもありました。特に、1月12日に行われた、河原町、新市街などでのワークショップでは、熊本市長と巻選手のお父さんも登場していただきました。

試合翌日の1月21日は、JFA広報委員会が熊本市内のホテルで開催され、報道関係者にも公開された中、地元関係団体のメンバーも出席し、MATCH FLAGの報告を行いました。委員の方々からは、取り組みを評価する声も相次ぎ、今後他会場でも実施することや、東京・御茶ノ水のサッカー協会事務所「JFAハウス」内にある、「サッカーミュージアム」内に展示することなどが決まりました。

この試合では、会場となる熊本県民総合運動公園陸上競技場(KKWING)に3万人を超える観客を円滑に輸送することが課題となっており、私はその広報の責任者として動いていました。このMATCH FLAGがスタートしてからは、県サッカー協会のホームページ上に新たにページを設け、制作の様子や完成写真などを随時掲載し、多くの方々に旗作りの楽しさを伝えるように意識しました。今後MATCH FLAGが他の会場に引き継がれるときには、参考にさせていただけると幸いです。

MATCH FLAGプロジェクトを通して、サッカーを見た事のなかった方々がサッカーに関心を持って、美術館を知らなかった方々がアートを身近に感じる事ができたことは、熊本にとっての大きな財産だと思います。この試合を通して生まれた新たな絆を、今後も活かしていきたいと強く願います。「熊本で行われた国際試合」の記憶をとどめ、このフラッグのもと、近い将来、もう一度国際試合を迎えていきたいと思います！

Match Flagについて Zen Design Project主宰 渡辺善文 (イベントプランナー/デザイナー)

正直、このプロジェクトの終了後、「あーしとけばよかった」とか、「こーなっていればよかった」という反省点は、思い付きません。「対戦両チームのナショナルカラーを配色した応援フラッグを制作し、貼り出す。」という実にシンプルな企画。しかし、このプロジェクトのディテールを考えてみると、初回にして完成度の高い内容でした。

例えば、「作りたい人は誰でも作れる」という事。イエメンすらピンと来ていない保育園児から、人生の荒波を一通り経験したご隠居まで、幅広い年齢層が、作りたいから作る。身体的ハンディキャップを持った方も「あまり複雑な作業は出来ませんが、ひたすら日の丸を切り出します！」という具合に作りたいから作る。

そこには専門知識も特殊技術もいらない。作りたいから作る。中には一人で6枚のフラッグを完成させたツワモノも現れた。手法にしても、ペイントではなく、色布を切って縫い付ける(貼る)というがGood。ソリッド感、コントラスト感のあるモノが完成する。入れる文字や形体、色もナショナルカラーに限定しているため、全体を通して統一感があり、結果、熊本の中心市街地を彩る、装飾アイテムとしてクオリティの高いモノとなりました。

ナニかを盛り上げるには、まず「当事者」を増やす事。「MatchFlag」を作った人々にとって、もはや「サッカー日本代表戦@熊本」は他人ゴトではないのだ。このような間口の広いワークショップを開催し、そこに携わる人を増やす。下通ダイエーで買い物していたイエメン人6名様も、きっと気を良くしてフラッグを眺めていたに違いない。うーん「MatchFlag」お見事です。

熊本市立長嶺小学校での「マッチフラッグのワークショップについて」 熊本市企画課 杉本健吾

本市は、「マッチフラッグ」をスポーツ・文化の振興に加え、シティセールスや中心市街地の賑わいを創出する絶好の機会と捉え、文化国際課、商業労政課、社会体育課などの関係課が一丸となり積極的に取り組みました。

特に、市立長嶺小学校では、4～6年生の全クラスでフラッグ作成に取り組み、5日間という短期間でしたが、50枚もの作品を完成させました。できあがった作品は、下通りの工事足場に設置しましたが、どれも個性的で魅力的な作品に仕上がっており、中心市街地の賑わいづくりに一役も二役も買っていました。

この熊本で萌芽した「マッチフラッグ」が、熊本の将来を担う子どもたちの一生の思い出になるとともに、今後、全国各地で継承され、発展していくことを願っています。

●熊本朝日放送webTV
「くまもと まちxひと チャンネル」内の
日比野克彦「HIBINO CHANNEL」で、
Match Flagのムービーが見れます。

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.41(別冊)
2009年3月発行(春号) ●無料●
●発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩 みゆき
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/コロニー印刷
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892